

「翌朝」「翌春」等を修飾する節のテンス

橋本 修

キーワード：連体修飾節のテンス、「翌朝」、発話時基準、トキ名詞句

要 旨

トキをあらわす名詞を修飾する節の中で、「翌朝」「翌春」等を修飾する連体修飾節の方が「翌日」を修飾する連体修飾節よりも発話時基準解釈を許容しにくい、という現象がある。この現象は、「前者の方が、比較の基準となる時点（の単位）が不明確である」ために起こると考えられる。

一方「翌朝」タイプの名詞を修飾する連体修飾節と、「まえ」「あと」を修飾する連体修飾節とを比べると、後者の方がさらに発話時基準解釈を許容しにくい。これは、主要部（被修飾名詞）の名詞としての自立性の差に関わっている可能性が高い。

0. はじめに

本稿では主として、「翌朝」「翌春」等の名詞を修飾する節のル／タ形が、「翌日」「翌年」等の名詞を修飾する節のル／タ形とは異なるトキ解釈上のふるまいを見せることを確認し、関係する現象を整理してその原因を明らかにすることを目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。1. で議論の前提となる連体修飾節のテンス現象を先行研究を参照しながら概観し、2. で問題の所在を特定する。3. において問題となる現象を確認・整理した後、そのふるまいの原因を検討する。

1. 連体修飾節のテンス現象概観

1-1 連体修飾節ル／タ形のタイプ

現代日本語において、連体修飾節のル／タ形が果たす機能には、いくつかの異なったタイプがある。ル／タ形が基準とする時点という観点からタイプ分けをした場合、大きくは「発話時基準」と「非発話時基準」という2つに分かれるというのが、寺村 1984、三原 1992 ほか、現在の標準的な見方のように思われる（詳細については各種議論があるが、本稿で現象的に重要なのは「発話時基準」の成立なので、どの立場をとっても本稿の議論が無に帰することはないと考える）。

本稿も大まかにはその枠組みに従う。2. 以下の議論のために、拙稿を含めた先行研究に依りながら、現象を概観する。

1-11

「発話時基準」とは、文字通り、当該の節のル／タ形が発話時を基準にしているタイプである。

(01) 去年の3月1日、太郎は「昨日亡くなった」高崎氏を自宅に招待した。

(02) 「来月帰国する」和夫は、2年後には再び渡欧する。

上の(01)(02)の連体修飾節「昨日亡くなった」「来月帰国する」のタ形・ル形は、それぞれ発話時から見た「以前(過去)」「以降(未来)」をあらわしていると解釈される。

1-12

「非発話時基準」タイプは、発話時以外の時点を基準とする。多くの場合基準となるのは、主節時(主節の出来事時)とされる。主節時を基準とする節の例は、以下のようなものである。

(03) 「来月以降にこのカメラを買った」人には、景品が送られる。

(04) あの日、「夕方出発する」人たちは、昼ごろからかなりビールを飲んでいた。

上の、(03)(04)の連体修飾節「来月以降にこのカメラを買った」「夕方出発する」は、いずれも、発話時基準の解釈が困難であることが確認できる(「来月以降にこのカメラを買った」時点は発話時より以降、「夕方出発する」時点は発話時より以前)。前者のタ形は、連体修飾節が、主節時(=「景品が送られる」時点)より以前であることをあらわし、後者のル形は、連体修飾節が、主節時(=「昼ごろからかなりビールを飲んでいて」時点)より以降であることをあらわしているとされる。これが主節時基準の節である。ここまでの現象・概観は、基本的に三原 1992 をはじめとする先行研究を踏まえており、本稿も用語等詳細を除き踏襲する⁴⁾。

非発話時基準となる節には、しかし、(03)(04)のような文とは別に、以下のような、主節時以外の時点を基準にしているタイプの連体修飾節もある。

- (05) 【決勝戦が行われる】前日の様子を思い出した。
 (06) 【太郎が東京に着いた】後のことが今から心配だ。

(05)(06)においては、連体修飾節のル／タ形が、発話時基準とも、主節時基準とも解釈しがたい²。(05)において、「決勝戦が行われる」時点は、発話時よりも前であるばかりか、主節時（＝「思い出した」時点）よりも前であり、連体修飾節のル形は、発話時・主節時以外の時点を基準にしているとしか考えられない。(06)においても事情は同様で、「太郎が東京に着いた」時点は発話時・主節時のいずれよりも後であり、連体形のタ形は、発話時・主節時以外の時点を基準にしているということになる³。

このタイプの連体修飾節は、「まえ」「あと」「前日」「翌日」「翌朝」等、時点と時点・事態と事態との時間的前後関係をあらわす名詞を修飾するものに限られる。橋本 1997・1998 ではこのタイプの節の基準時を「まえ」他の名詞句そのものが内在的に持つ時点であると解釈し、このタイプの節の基準時を「主名詞時」と呼んだ⁴。

以上、本稿では後段の議論の前提として、以下の(07)のように、連体修飾節のル／タ形（の機能）に発話時基準と非発話時基準の2つを認め、非発話時基準の中をさらに主節時基準と主名詞時基準とに分ける。

(07) 連体修飾節のル／タ形

- a 発話時基準
- b 非発話時基準
 - b 1 主節時基準
 - b 2 主名詞時基準

1-2 主名詞の種類と連体修飾節のル／タ形

連体修飾節のル／タ形が、上記(07)のいずれのタイプになる（なりうる）かの条件については井島 1991・三原 1992・三宅 1995・岩崎 1998 等、すでに各種の議論があるが、本稿にとってまず重要なのは、主名詞（被修飾名詞）の種類との関係である。

すでに1-12で触れたように、b 2の主名詞時基準となりうる節は、主名詞が「まえ」「あと」「前日」「翌日」「翌朝」等、時間の前後関係をあらわす名詞でなければならない。これらの名詞は、内在的に2つの時点と関係を持ち、その一方が主名詞時としてはたらく。例えば、前出の

(05) 「決勝戦が行われる」前日の様子を思い出した。

例えば、主名詞「前日」は、内在的に2つの時点を取り、その一つの時点が「決勝戦が行われる」時点であり、もう一つの時点が「その一日まえの日」であって、「前日」という名詞は、まさにその2つの時点の前後関係をあらわしている、ということになる。一方、内在的には複数の時点と関係しない「人」「場所」「事件」等の名詞を主名詞とする連体修飾節は、aの発話時基準かb1の主節時基準になるだけで、b2の主名詞時基準の用法は持たない。

ただし、ここで問題になるのが、当該の名詞句を主名詞とする連体修飾節（のル／タ形）は、a発話時基準や、b1主節時基準の用法を持ちうるかということである。実は、この問題のうち、当該の連体修飾節が、b1主節時基準になりうるかについては、b2の主名詞時基準とb1の主節時基準とを区別する文脈が限られているため、検討が非常に困難である（橋本 1997 では、当該の名詞句を主名詞とする場合、区別がつかないときはすべて主名詞時基準と見た方が理論的には経済的であると考えた）。一方、当該の連体修飾節がaの発話時基準の用法（解釈）を持つ（持つとすればどのような場合か）については、検討が可能にも関わらず、研究はわずかである。本稿では、当該の連体修飾節の主名詞を、「まえ」「あと」タイプ／「前日」「翌日」タイプ／「翌朝」「翌春」タイプの3つに分け、それぞれが、主名詞となった場合の連体修飾節における発話時基準の許容度に関して異なったふるまいを見せることを指摘し、そのふるまいの違いの原因について検討する。すでに橋本 1997・1998 である程度の現象の指摘は行っており、それとの関係上、本稿は「翌朝」「翌春」タイプ（を主名詞とする連体修飾節）のふるまいを中心に据え、残りの2者の場合とを比較するという記述のスタイルを取る。

2. 時間的前後関係を主名詞とする連体修飾節の発話時基準解釈

竹沢 1993 は、一定の例外を除き、名詞「まえ」「あと」を修飾する節が発話時基準になりにくいことを指摘している。

- (08) 「私が行く（*行った）」前に、太郎は帰った。
- (09) 「私が行った（*行く）」後で、太郎は帰った。
- (10) 「君が見た（見る）」一年も前に、私はその映画をアメリカで見た。
- (11) 「君が会う（会った）」2時間後に、僕も山田さんに会う予定です。

上記(08)(09)のように、通常の場合、主名詞「まえ」「あと」を修飾する節は、「まえ」を修飾する場合はル形、「あと」を修飾する場合はタ形という風に固定され、発話時を基準にとって自由にル／タ形が交替する（＝発話時基準となる）ことは難しい（いっぽう、(10)(11)のように、連体修飾節と主名詞「まえ」「あと」との間に「一年（も）」「2時間」のような要素が介在すると許容されるようになる。この点については本稿は扱えない。竹沢 1993 参照）。

発話時基準をとりにくい、とれるにしても制約がある、という点では、当該の、すなわち時間的前後関係をあらわす名詞句を主名詞にする連体修飾節は共通である。しかし、その細部については、

- I 主名詞が「まえ」「あと」タイプである場合
- II 主名詞が「翌日」「前日」タイプである場合
- III 主名詞が「翌朝」「翌春」タイプである場合⁵

の3つの場合で異なる。この異なりの存在については、橋本 1998 で概観した。本稿では、これらの現象を確認・整理した上で、その異なりの原因について検討してみたい。

3. 「翌朝」「翌春」等を修飾する連体修飾節の特殊性

橋本 1998 では、従属節事態と主節事態との前後関係をあらわす名詞を修飾する連体修飾節における発話時基準解釈のしやすさをとりあげた。その結果は、「前日」「前週」「前月」「前年」「翌日」「翌週」「翌月」「翌年」等を修飾する節（のル／タ形）が相対的に発話時基準を容認しやすく、「まえ」「あと」や、「翌朝」等を修飾する節が容認しにくい、というものであった（橋本 1998、pp89-90 参照）。2. の分類で言えば、II の場合は比較的発話時基準解釈を容認しやすく⁶、I・III の場合は相対的にIIの場合より許容されにくい、ということである⁷。

- (12) 〔決勝戦が行われた〕前日に、三位決定戦があった。
- (13)?? 〔決勝戦が行われた〕まえに、三位決定戦があった。
- (14) 〔試験を受けた〕前月に、ちょっとしたけがをした。
- (15)?? 〔試験を受けた〕まえに、ちょっとしたけがをした。
- (16) 〔太郎が授賞式に出る〕翌日、次郎も会議で東京に出る。
- (17)?? 〔太郎が授賞式に出る〕あと、次郎も会議で東京に出る。

(18) [長野に新幹線が開通する] 翌年、オリンピックが開かれる。

(19)?? [長野に新幹線が開通する] あと、オリンピックが開かれる。

(12)(14)(16)(18)の連体修飾節は、いずれも発話時基準となっていることが確認できる。例えば(12)の連体修飾節の「決勝戦が行われた」時点は「三位決定戦があった」時点より以降(あと)であるから、述部タ形の基準になっているのは主節時でも主名詞時でもなく、発話時であるとしか考えられない。以下、(14)(16)(18)においても、同様にそれらの連体修飾節は発話時基準をとっていることになる。

一方それに対応する(13)(15)(17)(19)の連体修飾節は、許容されれば発話時基準となるはずであるが、実際には上記のように許容されない。念のため付記すれば、いずれも非発話時基準(主名詞時基準)となる方の形式が選択されていれば、以下のように許容される。

(20) [決勝戦が行われる] まえに、三位決定戦があった。

(21) [試験を受ける] まえに、ちょっとしたけがをした。

(22) [太郎が授賞式に出た] あと、次郎も会議で東京に出る。

(23) [長野に新幹線が開通した] あと、オリンピックが開かれる。

奇妙なのは、以下のような、「翌朝」を主名詞とする連体修飾節である。

(24)? [太郎が授賞式に出る] 翌朝、次郎も会議で東京に出る。

(24)は、例えば(17)ほどではないが、(16)に比べればかなり許容度が下がる。この傾向は「翌朝」だけでなく、「翌晩」「翌春」等でも見られる。

(25) [選挙結果の大勢が判明する] 翌日に、党首会談が行われるだろう。

(26)? [選挙結果の大勢が判明する] 翌晩に、党首会談が行われるだろう。

(27) [新幹線が開通する] 翌年に、オリンピックが開かれる。

(28)? [新幹線が開通する] 翌春に、オリンピックが開かれる⁸⁾。

それぞれの例文の許容度に微妙な違いはあるものの、全体として、「翌日」「翌年」のタイプに対して、「翌朝」「翌晩」「翌春」のタイプを修飾する連体修飾節の方が発話時基準をより許容しにくいことは確かなようである。

この、「翌朝」「翌晩」「翌春」等を修飾する連体修飾節（すなわち 2. のⅢの場合）のふるまいの特殊性は、どのように解釈すべきであろうか。「翌日」タイプと比べた場合の、この「翌朝」タイプの、名詞としての違いはどこにあるのか、また、「翌朝」タイプと同様に連体修飾節の発話時基準解釈を許容しにくい「まえ」「あと」との関係をどのように見るべきかについての検討を、4. で行う。

4. 時間的前後関係をあらわす名詞のタイプの違い

4-1 「翌朝」タイプと「翌日」タイプとの違い

まず、当該の、「翌朝」タイプの名詞を修飾する連体修飾節と、「翌日」タイプの名詞を修飾する連体修飾節との違いについて考える。この点に関して、結論を先取りして言えば、「翌日」タイプに比べ、「翌朝」タイプは、比較の基準となる時点と、比較される時点との差を測る単位が不明確である」ということが、問題の現象の原因になっていると考えられる。

- (16) [太郎が授賞式に出る] 翌日、次郎も会議で東京に出る。
- (24)? [太郎が授賞式に出る] 翌朝、次郎も会議で東京に出る。
- (25) [選挙結果の大勢が判明する] 翌日に、党首会談が行われるだろう。
- (26)? [選挙結果の大勢が判明する] 翌晩に、党首会談が行われるだろう。
- (27) [新幹線が開通する] 翌年に、オリンピックが開かれる。
- (28)? [新幹線が開通する] 翌春に、オリンピックが開かれる。

(16)と(24)とを比べた場合、(16)の「翌日」が、何を基準にしているか（何の翌日なのか）と言えば、「太郎が授賞式に出る日」であることが直感的に分かりやすい。一方、(24)の場合、「翌朝」が何を基準にしているかは、(16)の場合ほど明確でない。「太郎が授賞式に出る「日」」なのか、「太郎が授賞式に出る「朝」」なのか、それとも単に「太郎が授賞式に出る「時点」」なのか等が、(16)に比べてはっきりしないのである。言いかえると、「翌日」の場合は、相対的な時間の差を測る単位が、「日」であるとはっきりしている。一方「翌朝」の方は、相対的な時間の差を測る単位が「日」であるのか「朝（ごと）」なのか、それともさらに別のものであるのか、どうもはっきりしない。そのため、(16)では、発話時基準解釈においても連体修飾節「太郎が授賞式に出る翌日」⁴⁹を、意味的に「太郎が授賞式に出る日の翌日」であるという形で、基準となる時点（の単位）を特定の解釈しやすいので

あるが、(24)ではそれがしにくく、そのことが(24)の許容度を(相対的に)下げているのではないかと考えられる。(25)～(28)についても同様に考えられる。(25)の「翌日」、(27)の「翌年」は、いずれも相対的な時間関係を測る単位が「日」「年」であることが明確である。そのため、(25)(27)の連体修飾節はそれぞれ意味的に「選挙結果の大勢が判明する日の翌日」「新幹線が開通する年の翌年」という意味が特定の得やすいため許容されやすいが、(26)の「翌晩」「翌春」ともに、時間関係を測る単位が不明確なため、そのような特定の解釈が得にくく、その結果許容度が下がる、ということになる。

4-2 「翌朝」タイプと「まえ」「あと」との違い

名詞「まえ」「あと」は、「翌朝」タイプの名詞と同様(あるいはそれ以上に)、連体修飾節の発話時基準解釈を許容しにくい。この点はどのように考えるべきであろうか。既に見た例文(13)(15)(17)(19)を再掲する。

- (13)?? [決勝戦が行われた] まえに、三位決定戦があった。
(15)?? [試験を受けた] まえに、ちょっとしたけがをした。
(17)?? [太郎が授賞式に出る] あと、次郎も会議で東京に出る。
(19)?? [長野に新幹線が開通する] あと、オリンピックが開かれる。

まず第一点として、これらの例文の許容度が低いのも、「翌朝」「翌晩」「翌春」等と同様、「翌日」タイプに比べて比較の基準となる時点(の単位)が不明確であるためであるという可能性がある。確かに「翌朝」タイプと同様、「まえ」「あと」は、比較の基準となる時点の単位が、「翌日」タイプに比べて不明確であるとは言えそうである。

- (12) [決勝戦が行われた] 前日に、三位決定戦があった。
(13)?? [決勝戦が行われた] まえに、三位決定戦があった。

例えば(12)の「前日」を修飾する「決勝戦が行われた」が、意味的に「決勝戦が行われた日の」という特定の解釈をとりやすいのに対し、(13)の「まえ」を修飾する「決勝戦が行われた」は意味的に「決勝戦が行われた「何の」前なのか、特定しにくい。

(16) [太郎が授賞式に出る] 翌日、次郎も会議で東京に出る。

(17)?? [太郎が授賞式に出る] あと、次郎も会議で東京に出る。

(16)と(17)の比較についても同様である。(17)は比較された時点同士の、時間の違いをはかる単位が不明確であるために、(24)同様許容度が低いのだと、ひとまず考えることが可能である。

しかし、「まえ」「あと」を主名詞とする連体修飾節の発話時基準解釈は、「翌朝」タイプの名詞を主名詞とする連体修飾節の発話時基準解釈より、一段と許容度が低い。すなわち、例えば以下の、

(17)?? [太郎が授賞式に出る] あと、次郎も会議で東京に出る。

(24)? [太郎が授賞式に出る] 翌朝、次郎も会議で東京に出る。

の2つを比べると、「あと」を含む(17)の許容度の方が、「翌朝」を含む(24)より、一段と低い。この差に関しては、「まえ」「あと」の方が、「翌朝」タイプの名詞よりも一段と比較の基準となる時点（の単位）が不明確である」と言えるかどうかは微妙である。

本稿では上記の差、すなわち(17)のようなタイプの方が(24)のようなタイプより一段と許容度が低いという点については、別の要因が（あるいは別の要因も）関わっていると見たい。それは、「まえ」「あと」が「翌日」タイプ（や「翌朝」タイプ）の名詞に比べ、名詞としての自立性（相対的に）欠ける」ために発話時基準解釈の許容度が（さらに）低いのだ、という見方である。この見方を支持する現象がいくつかある。

(29) [太郎が切符を買っている] あいだ、花子は駅員と話をしていた。

(30)?? [太郎が切符を買っていた] あいだ、花子は駅員と話をしていた。

(30)のように、「あいだ」も、連体修飾節の発話時基準解釈の許容度は、「まえ」「あと」と同じ程度に低い。これらの名詞は、「翌日」タイプ、「翌朝」タイプと異なり、主節において単独で（連体節等をつけない形で）時間を指す用法を持ちにくい。

(31) *まえ、三位決定戦がある。

(32) *あと、次郎も会議で東京に出る^{*10}。

(33) *あいだ、花子は駅員と話をしていた。

(34) 翌日／翌朝、雨が降った。

(31)(32)(33)の「まえ」「あと」「あいだ」が、時をあらわす名詞としては許容度が極めて低いのにに対し、(34)は許容される。「まえ」は「まえに」、「あと」は「あとで」のような形で単独用法も許容される場合があるが、全体として単独用法に欠落部分を持つという点で、「まえ」「あと」「あいだ」の名詞としての自立性の低さははっきりしている。

ここで、自立性の極めて低い、接続助詞「まで」を主要部とする節の、発話時基準解釈の許容度を見てみる。

(35) [日が沈む] までにテントの準備を終えた。

(36) * [日が沈んだ] までにテントの準備を終えた。

「まで」を主要部とする節の発話時基準解釈の可能性を持つ(36)は、「翌朝」タイプの名詞・「まえ」「あと」「あいだ」を修飾する連体修飾節の発話時基準解釈より、さらに許容度が低く、ほぼ不可能であると言ってよい。(この用法での)「まで」の節は、ル形に固定されている(＝非発話時基準用法に固定されている)のである。

このように見てくると、次のような見方が自然であるように思われてくる。すなわち、「従属節のうち、主要部の名詞としての自立性が高いものほど発話時基準解釈を許容しやすい。主要部の名詞としての自立性が低くなるほど発話時基準解釈は許容されにくくなり、主要部が完全に接続助詞になると発話時基準解釈は不可能になる」という見方である^{*11}。「翌朝」タイプに対する、「まえ」「あと」タイプの、連体修飾節の発話時基準解釈のさらなる許容度の低さは、このように解釈すべきと思われる。

5. まとめと課題

本稿の結論の概略を繰り返す。

- ・「翌朝」「翌春」等を修飾する連体修飾節の方が「翌日」を修飾する連体修飾節よりも発話時基準解釈を許容しにくいのは、「前者の方が、比較の基準となる時点(の単位)が不明確である」からと考えられる。
- ・「翌朝」タイプの名詞を修飾する連体修飾節と、「まえ」「あと」を修飾する

連体修飾節とを比べると、後者の方がさらに発話時基準解釈を許容しにくい。これは、主要部(被修飾名詞)の名詞としての自立性の差が関わっている可能性が高い。

本稿の扱った現象は小さいものであるが、従属節のテンス現象を見る上では、「どのような場合に発話時基準となり、どのような場合に非発話時基準となるのか」という点を避けては通れず、上記の現象にも目を配る必要がある。

今後の課題は多い。本稿で扱った連体修飾節の主名詞は、「翌日」タイプ、「翌朝」タイプ、「まえ」「あと」タイプの3種であるが、これらでトキをあらわす名詞句を網羅しているわけではない。また、「あいだ」「うち」「直後」などの名詞を扱っていないという点で、トキをあらわす名詞のなかでも、2つの時点(事象)の相対的時間関係をになう名詞さえ網羅していない。これら、トキをあらわす名詞を修飾する連体修飾節の全体的な記述・位置づけが、当面もっとも身近な課題だと思われる。

注

- *1 「主節時基準」という概念については批判もある。大木 2002 他参照。大木 2002 の「主節時基準という現象は見せかけ上の現象である」という主張は一定範囲で有力であるが、その全てあるいは一部が最終的に「主節時基準」と呼べなくなったとしても、それらと、「発話時基準」との区別は完全に無に帰することはないと、本稿筆者は見る。従属節ル/タ形全体の本質論全体については、本稿では議論する準備がない。
- *2 (06)の主節は、「今から」があるために、現在時を指していると考え。「心配だ」のような述語が未来時を指している可能性があり、現在時を指す確例としては現在時を含意する副詞句を含んだ用例を用いるべきことは岩崎 1999(p17)の言うとおりである。
- *3 岩崎 1999 はこのタイプの節のル/タ形をテンス対立とは見ず、ル形=開始点、タ形=終了点というような形で、アスペクトをあらわしているとする。当該現象がテンスなのかアスペクトなのかについては最終的な判断を保留するが、当該タイプのル/タ形が発話時基準でも主節時基準でもないことについては岩崎 1999 と(橋本 1997 も含め)本稿筆者との間に違いはない。
- *4 橋本 1997・1998 において指しているものは概念的には明確であるが、これを「主名詞時」と呼んだのは、ネーミングとしてミスリーディングである可能性がある。今後可能であれば呼称を改善すべきかもしれない。
- *5 このタイプには「前-」系の確例がないように見える。「前朝」「前春」などという語は存在しないように思われる。この点については単なる語彙的な偶然か、意味論的に

理由のあることなのか未考である。

- *6 無条件で容認するわけではない、という点については橋本 1998 参照。
- *7 以下、主名詞（被修飾名詞）が連体修飾節と内の関係にある読み（(12)で言えば、主名詞「前日」＝「決勝戦が行われた日」という読み）は、全て除外して考える。時間類をあらわす名詞が修飾節に対し内の関係に立つ連体修飾構造自体がどのような条件の下で成り立ちやすいか、成り立った場合にどのような基準時をとるかについては別個に考える必要があるが、そこでの帰結が本稿で得た知見を大きく損なう可能性は低いと考える。
- *8 (28)においては「翌春」＝「新幹線が開通する時点」という、「内の関係」の連体節としてであれば、発話時基準の読みも比較的許容度が高いようであるが、この読みは本稿で問題とする読みではない（実質的には注7の繰り返しになるが、確認のため追記）。
- *9 「太郎が授賞式に出る翌日」は、厳密には連体修飾節ではなく「連体修飾節を含む名詞節」とでも呼ぶべきものであるが、名称として煩雑なので、論旨に混乱を来さない範囲で便宜的に「連体修飾節」と呼ぶ。
- *10 「あと」が、「それまでの話題に話題を追加する」というような意味をあらわすような時間的前後関係をあらわす用法でない読みとしては OK だが、ここで問題にされている用法とは異なる。
- *11 ただし、これは、内部に主題のハの現れ得ない、いわゆる B 類節までの節についてのみ言えることと思われる。主題のハの現れる C 類節においては主節時基準の読みはかなり限定され、発話時基準の読みの方が普通である。詳細については橋本 1995 も参照。

参考文献

- 井島正博 1991 「従属節におけるテンスとアスペクト」『東洋大学日本語研究』 4
- 岩崎卓 1998 「連体修飾節のテンスについて」『日本語科学』 3
- 岩崎卓 1999 「マエ節・アト節内のル形・タ形について」『光華日本文学』 7
- 大木一夫 2002 「述定の時間・想定時間」『国語論究 第10集 現代日本語の文法研究』
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
- 竹沢幸一 1993 「日本語のトキの副詞節の統語的特性に関する一考察」『個別言語学における文法カテゴリーの一般化に関する理論的研究（平成4年度筑波大学学内プロジェクト 研究成果報告書）』
- 寺村秀夫 1975-78 「連体修飾のシンタクスと意味 その1～その4」『日本語・日本文化』 4～7 大阪外国語大学留学生別科（寺村秀夫 1992『寺村秀夫論文

集 I」くろしお出版 に再録)

- 寺村秀夫 1984『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
中右実 1980「テンス・アスペクトの比較」『日英語比較講座 2 文法』大修館書店
丹羽哲也 1996「ル形とタ形のアスペクトとテンス 独立節と連体節」『人文研究』48-10
橋本修 1995「現代日本語の非制限節における主節時基準現象」『文藝言語研究 言語編』27
橋本修 1997「マエ・アト節のトキ解釈」『文藝言語研究 言語篇』33
橋本修 1998「「前ー」「翌ー」等を修飾する節のトキ解釈」『文藝言語研究 言語篇』34
福田嘉一郎 2003「いわゆる叙想的テンスの出現条件」『日本語文法学会第4回大会発表
論文集』日本語文法学会
町田健 1989『日本語の時制とアスペクト』アルク
三原健一 1992『時制解釈と統語現象』くろしお出版
三宅知宏 1995「日本語の複合名詞句の構造－制限的／非制限的連体修飾をめぐる」『現
代日本語研究』2

〔付記〕

本稿は筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書平成 12
年度Ⅳ所収の、同題論文を改訂したものである。本稿の作成にあたり同プロジェク
トのメンバーにコメントを頂き感謝申し上げます。

はしもと おさむ／文芸・言語学系講師
(2004年9月29日 受理)